昭和39年11月10日第三種郵便物認可　昭和41年4月5日国鉄東局特別扱承認雑誌第2343号　昭和43年3月1日発行　第5巻第3号通巻第43号（毎月1回・1日発行）

月刊漫画ガロ

No.43
1968
3月号

カムイ伝 ㊴
赤目プロ作品
白土三平

鬼太郎夜話 ⑩
水木プロ製作
水木しげる

（前回まで）

カムイ伝㊴

一方に藩内勢力抗争の側面をもちながらも、危機に立った藩の窮乏財政立て直し策として採られた藩札制度は、札価値の著しい下落、諸物価の暴騰等によって大混乱に陥り、かえって領民の生活を苦境のどん底へ突き落としていった。中でもとりわけ、その渦中深く巻き込まれて甚大な被害をこうむった者らは、百姓および他領からの出稼人夫らであった。百姓は、翌年の作付用に残しておいた種籾さえも食い尽くして、なお飢え、他領からの出稼人夫らにいたっては、正金銀の領外流出を防ぐ藩の方針によって藩札とこれとの交換を拒まれたことから、実質的にそれが帰郷の足止めとなり、ここに彼らの怒りと不安が爆発してついに打ち毀しとなって現われたのであった。

だが、彼らのこの行動は、それがはじめから無計画的、偶発的であったために権力のまえに悉く潰敗し、その屍を異郷の地に晒される結果となったのである。

続いて起こった百姓一揆は、玉手、八木沢、花巻、部田、大沢の村々の百姓らが結集して、かつてないほどの規模をもちながら発展するかに見えたが、それが事前に**玄蕃**、目付ら権力者に察知されたことによって、多くの百姓が立ちあがったときには、すでに村々の代表的人物は勝手な理由を付されて人質として拘禁され、あるいは一揆の百姓衆内部にまで横目の輩下の者らが潜入するなど敵に先手を取られたうえに、要求書は役人に渡しこそすれ、すでに用意された懐柔策によって鎮圧されたのであった。つまり、先に捕らわれた者らは、夜明けとともにそれぞれの村へ帰され、札会所元締役**蔵屋**は、不正発覚の理由で解職、斬首されたのである。もちろんこの裏には、一揆が大きくなり紛糾が長びけば、それが失地回復を策す城代側に利用されるおそれのあるのを目付ら実権派が避けたことと、蔵屋の斬首という思いきった処断に出たのは、やはり、城代派が蔵屋を倒すことによって目付側の経済的支柱を突き崩そうとしている戦略が明らかにされたからであった。

一揆のあのような鎮圧といい、城代派の戦略の意表をついた思いきった処断といい、また蔵屋の後任に**千手の鬼兵衛**を手まわしよく据えて混乱した藩札制度をよみがえらしめた手腕といい、こうした手腕と才覚とはこれまでの目付ら権力の側には見られなかったものである。いうまでもなく、そこに玄蕃が加わったことによるのであるが、その玄蕃こそひそかに実兄である目付**橘軍太夫**を倒しておのれの手に権力を握ろうと策しているふうなのである。だがその玄蕃にしても、**城代**を徹底的に潰そうと謀りながらもそこに実際に手を下せないのは、城代がいわば日置藩の要ともいうべき秘密を握っているからであった。また、**夢の七兵衛**が直接には藩経済から退きながらも、あくまでこの小藩である日置藩に固執するのも、小藩でありながら幕府でさえ手を出せないこの秘密をめぐってのことであるが、その秘密もいまや幕府隠密団小頭**搦の手風**や**カムイ**らによって次第にその実体を明かされつつあった。

月刊漫画 ガロ 三月号 目次

表紙絵・**白土三平**

赤目プロ作品　白土三平

ガロ 臨時増刊号

漫画に新境地を切り拓いた

つげ義春特集

つげ義春が構築した独自の世界………そこには、人間を、また自然を凝視する静かなしかも鋭い眼がある。そして、彼の人気の秘密もそこにある。

▲収載作品▲

運　命
不思議な絵
沼
チーコ
初茸狩り
通　夜
山椒魚
李さん一家
海辺の叙景
紅い花
西部田村事件
書下ろし一篇（題未定）

●つげ義春作品年表・解説

4月下旬全国書店で一斉発売！

すぐ品切になるかも知れませんのでお近くの書店でご予約下さい。

発行所　東京都千代田区神田神保町1の55　青林堂

“「平常」と「異常」の隔り”

——高崎、羽田、ここ、——

上野昂志

一瞥した限りでは、高崎経大は「平常」をとり戻したかのように見えるかもしれない。大学当局は、当然、「やっと正常な状態にかえりました」ぐらいのことは言ってるだろうし、学内も静まりかえっているだろう。

だが、その「平常に復した」大学をじっと眺めてみれば、「平常」を生みだしている異常に静かな力の圧迫に気付かざるをえない。公然たる暴力の行使から隠然たる威しへの戦術転化。それが、「異常な事態」から「平常」にかえるということの実質的内容なのである。10月8日の羽田空港に至る二つの橋が、あるいは11月12日の大鳥居駅周辺が、現在ではあたりまえに人が歩き車が通るただの橋、ただの交差点にもどっているのと同様に、高崎経大はさしあたっての「平常」を手にしているに過ぎない。学生や若い労働者の頭を叩きわることによって、羽田を「正常化」したのと同じく、権力は、執拗に闘う学生を高崎経大から叩き出すことによって、大学を「正常化」したのである。そして今、学内から追い出したものをみせしめとして示すことで、大学は静かな威嚇を行なっているのである。

10・8の後、文部省は、大学側に学生の指導を要請し、11・12では、警察は捕えた学生を釈放する時に親を呼んで「子供を善導するように」という説得工作をした。学生の生活の場そのものに圧力をかけるこのようなやり方は、今後更に一般化するだろうが、高崎経大では、既に徹底的に行なわれていた。親をおどすというこの方法は、罪が一族に及んだ時代を想わせるが、しかし、核家族化したといわれる現代において なお有効な方法であろう。特に、生活を親の援助にあおいでいる大多数の学生たちは、親との絶縁は即座に生活の危機を意味する。だが、そればかりではない。

「あなたのお子さんは、このままじゃ就職も難かしいですよ。悪くして警察の御厄介にでもなったりしたら……」というような威しは、現実的根拠をもっているだけに、親にとっては切実である。強大なもの、力のあるものの恐ろしさを、生活の現実において嘗め尽くしてきた親の怯えと悲しみに この時学生は直面しなければならない。自分の生活と親の生活が、現実の基底部で問われるのである。映画『圧殺の森』(高崎経大の闘争の記録映画)に、大学に呼びだされた親と学生が、ゆっくりとしたとぎれ勝ちの会話を続けているショットがあった。恐らくそれは、どこまでしゃべり合っても果てのないものであったろう。既に現実的な解決はなく、あるのはただ解決のつかない重さに耐えることでしかないのだから。

最も激しく、最も執拗に闘い続けた者達は、現在孤立した私的生活に閉じこめられているかのように見える。40年4月頃は、高崎経大の一人の学生として「不

正入学反対」デモに参加した者が、現在では、「本学とは関係なき」路傍の一個人としての生活に、あるいは「警察の御厄介」になっている一人の犯罪者としての生活に押しこめられている。大学に「平常」は戻ったけれど、彼らに「平常」はない。否、彼らを「異常」な地点に追いこむことによって、大学の「平常」が支えられるのである。だが、そこでの強いられた私的生活は、生活自体、大学を「正常化」した権力との格闘にほかならない。従って彼らは、自らに押しつけられた生活を喰い破っていくことを通じて、自分の生活を成立させるほかないのだが、そのことは同時に、「平常」を装う大学の土台をつきくずす行為に重なっているのでもある。

ところで、何台もの装甲車と、様々な武器で身を固めた機動隊の守っている「禁止線」に向かって突進をはかるデモは、自分の力を知らないものの無暴な行為にも見える。既に百人位の数に分断された学生達が、「禁止線」を前にして隊列を整えるために足踏みしている姿はパセティックでもある。ぶつかれば、必ず負けることは目に見えている。隊列は蹴散らされ、機動隊の警棒で頭をなぐられ、幾人かは手錠をかけられひきずりまわされるだろうことは、あらかじめ決められていたことのように確かである。そして又、デモ参加者一人一人にとっても、そのことは自明であったはずだが、にもかかわらず、デモは突き進んでいく。負けるとわかっていながら、何故に「禁止線」を踏みこえようとするのか、この問いにデモの根源的な意味の全てがかかっているように思われる。

地上にひかれた一筋の線、それは、たかだか一本の線に過ぎないけれど、それが法秩序によって定められた「禁止線」である限り、あるいは、法秩序の独占体である国家によって定められた国境である限り、犯してはならないタブーである。デモにおける「暴徒」とは、このタブーを犯すことを意味している。制裁を受けるのはわかりきっていながら、それでもなお「禁止線」を踏みこえようとするデモの表現している意志は、このタブーの根底的な否定にほかならないが、それはデモ参加者一人一人によってはっきり自覚された意志であるよりも、デモという集団のもつ本源的な性格である。それは、生活の場からの、法秩序を超えようとする自由な意志である。

ところで、法秩序を法秩序として支えているものは暴力にほかならない。暗黙の威しから、公然たる制裁に至るまでの暴力の存在によってのみ、法秩序は実効を持つのであるが、その暴力を表現する言葉が、「公共の安全」であり、「公共の福祉」であるために、暴力によって成り立っている法秩序を逸脱する行為には、全て「暴力」という名が与えられることになる。この逆立した関係を否定しようとする限り、人は「暴徒」と呼ばれ、さしあたっては敗北をつづけるほかはない。しかし、その敗北の内を貫いている法秩序否定の意志において、一瞬逆立した法秩序と生活との関係の総体を照らしだすのである。

11月12日の夕方、大鳥居の踏切から蒲田駅まで歩いてきた時、商店街の灯が嘘のように「平穏」に見えたのだが、あの時から一か月余りの時間が経った現在、私たちはもう街の灯に驚きはしない。そして、街の灯のかたわらに立って、11・12の羽田をふりかえる時、それは遙か遠くに思われる。この隔りの感覚のうちに現在の情況が投影されているのだが、さしあたっては、現実の隔りを、その垂直の隔りを、自らの足で幾度も辿るほかはないように感ぜられる。

（67年12月19日）

カムイ伝が第1回から入手できます！

愛読者の渇望に応えてバックナンバー再版

第1冊～第6冊（第1回～第12回）頒布中！

早くも三年余の歳月を数えた白土三平先生畢生の
大作「カムイ伝」を第1回からこの機会にぜひ！

―カムイ伝再版促進会―

カムイ伝の第1回から第12回までを、6分冊にして再版しました
第1冊（カムイ伝1・2）から第6冊（11・12）まで全巻頒布中です
カムイ伝の再版（第一次）は、一応これでおわりました　これは、
希望者頒布・限定出版で、書店では一切発売しておりませんので、
誌代（送料含む）を添えて、直接下記へお申込み下さい
なお、5分冊とも「ガロ」の本誌と同じB5判です

頒価 各冊 230円 〒20円（切手も可・但し1割増）

申込先・東京都千代田区神田神保町1－55　**青林堂**内　**カムイ伝再版促進会**

切手代納の場合は、なるべく15円切手

〈ガロ〉特別セール案内

バックナンバーの部

今、全国で爆発的な人気を呼んでいる白土三平の大河マンガ＜カムイ伝＞は39年12月号から本誌に連載されていますが、これをはじめからお読み下さる方々のために、バックナンバーの特別割引セールを実施中です。

〈ガロ・在庫セット〉

41年4月号～42年1月号

10冊・1組 特価 1,300円

（〒1組・100円）

セットのほかに、1冊でも分売いたします。ただし、41年3月号までは品切れです。（1冊送料共150円）

新刊予約の部

月刊雑誌“**ガロ**”を、**少しでも安く**、しかも**続けて読みたい方々の**ご要望にこたえて、次の通り**特別予約セール**を実施いたしております。

〈Aコース〉　6カ月分予約前納の方には、800円に割引の上、「白土三平傑作選集」（130円）を無料進呈します。

〈Bコース〉　1カ年分予約前納の方には、1,600円に割引の上、白土三平の単行本を1冊無料進呈いたします。

★郵便料金の値上げに伴い、今後のご予約には送料（Aコース・100円、Bコース・200円）を申し受けることになりましたのでご諒承下さい。

申込先・東京都千代田区神田神保町1の55　青　林　堂